

研究論文

育ちあう個と集団の相互作用過程

子育てサークルの親を中心に

吉本 朋子

Process of Interaction between Individuals and a group
growing together: on mothers in parenting groups

YOSHIMOTO Tomoko

In this paper, the process of interaction between mothers and a parenting group is investigated. Mothers taking part in parenting groups were questioned concerning their infant care. Simple phrases were found which reduce mothers' anxiety for infant care.

Growing mothers, who played with other infants excepting theirs, were observed in the group. Mothers were also found who harden their faces and who behaved unsociably in parenting groups. A new infant care system was proposed before the stage of kindergarten. Work systems were discussed for better family life.

Key words : parenting group, anxiety for infant care, growing together

キーワード : 子育てサークル, 育児不安, 育ちあい

・本研究の問題と目的

これまで出産や育児は、その子どもを産んだそれぞれの親の問題、いわば個人的な問題として考えられることが多かった。しかし、育児能力は、本来社会に存在していると考えべきであり、社会の育児能力が何らかの理由で衰退してきたときに、個々の親が育児に苦労し始めるのである。したがって、子どもを育てることはそれほど苦労することではない、という感覚をすべての親に与えていくためには、社会の育児能力を現代の社会状況に応じて高めていくしかない（汐見, 2000）。

地域の子育てサークルを、そのようなさまざま

まな努力と工夫のひとつとして捉えることができると思う。

子育てサークルの活動に参加する親が、以前より子育てが楽になったと感じるのはどういときだろうか。個々の親にとって、子育てサークルという社会的ネットワークが、養育態度や養育行動にどのような影響を与えるのだろうか。また、個々の親は子育てサークルに対してどのように参加し、働きかけていくようになるのだろうか。そして、サークルはどのような影響を受けて変化していくのだろうか。

このような問題意識に基づき、子育てサークルに参加する個々の親とサークルとの両者の相互作用のようすを捉え、個々の親と社会の育児能力が高まっていく（あるいは高まっていけない）

相互作用過程の特徴を見出していくことが、本研究の目的である。

子育てサークルに参加している親に対する調査と、子育てサークルへの継続的な参加観察を実施した。

・子育てサークルに参加する親に対する調査

調査方法 自記入式質問紙による調査であった。子育てサークル活動時に、著者が参加者に配布し、当日および後日1人ずつ回収した。

調査対象 京都市内の3つの子育てサークル(未就園児とその保護者でつくる育児グループ)の参加者35名

調査実施時期 2003年1月から3月

調査項目 次の5種類の項目について尋ねた。

1. 母親が子育て中に楽になったと感じること
2. 子育てサークルに参加したことが母親に与えた影響
3. 母親へのどんな言葉かけが子育てを楽にするか
4. 子育てサークルに参加する母親の子育てを支えている人たち
5. 子どもの年齢

1から4の調査項目について、実際の質問は以下のとおりであった。

1. 子育て中にあなたが「子育てが楽になった」と感じたことがあるとすれば、どんなときでしたか。(子どものことでも、まわりのことでも、いくつでも書いてください。)
2. 母と子のサークルに参加したことで、あなたの人間関係や子育てに何かいい影響がありましたか。(はい・いいえ)

それはどんなことですか。(いくつでも自由に書いてください。)

3. あなたはまわりの人からどんな言葉かけ(や働きかけ)をされると、子育ての不安感が軽くなりますか。(具体的なことでも何で

も自由に書いてください。)

4. 子育てのことであなたが一番頼りにしているのはどなたですか。あなたにとってどんなことが頼りになりますか。

子育てのことであなたが2番目に頼りにしているのはどなたですか。あなたにとってどんなことが頼りになりますか。

ほかにも頼りになる人がいますか。(はい・いいえ)それはどんな方たちですか。

回収結果 配布数35,回収数34(回収率97%),有効回答数34(有効回答率97%)

調査結果と考察を調査項目順に述べる。

1. 母親が子育て中に楽になったと感じること

子育て中に楽になったと感じたことを回答した母親は32人(94%)であった。

大別して2種類の回答があった。おもに子どもの成長によって子育てが楽になったことを答えたもの(19人)と、おもに母親の変化によって子育てが楽になったことを答えたもの(13人)である。

代表的な回答を以下に示した。()内は子どもの年齢である。

- ・初めは泣くことがどのような意味なのかわからなかったけど、最近では何とかなぜ泣いているのか少しずつわかってきたような気がします。それと少しずつですが、一人で遊ぶこともできるようになったので楽に感じることです。(0歳)
- ・子どもが少しでも言葉が話せるようになり、意思が通じ合えるようになったとき。子どもの言いたいことなどがわかったとき。(1歳)
- ・大分、言葉が出るようになったので、コミュニケーションが以前より上手くとれるようになり、ちょっとした会話らしきものができる

ようになって私自身とても楽しく思います。

（1歳）

- ・以前は用事をしている時に泣かれたら、など必要以上に気になったけれど、なんとかなると思えるようになった。（1歳）
- ・1人で機嫌よく遊んでくれる時間が増えたとき。生活のペースが決まってきたとき。同じくらい歳の子を持つ友達が自分にできたこと。（1歳）
- ・泣いたらどうしようって思っていたとき、「子どもは泣くのが体操。放っておいて大丈夫」と言われてホッとした。（1歳と0歳）
- ・同じくらい歳の子を持つ友達ができたこと。（1歳）
- ・下の子が1歳過ぎて姉妹で遊ぶようになったとき。（2歳と1歳）
- ・1日1日成長しているのがわかる。（2歳）
- ・二人目の子が生まれてから、一人目の子のママべったりがましになってきたので、パパにめんどうを見てもらえる。（2歳と0歳）
- ・上の子が言葉が増えて、話していて楽しい。（2歳と1歳）
- ・少しの間ならひとりで遊んでいられる（親と離れられる）ようになった。おむつが早くとれた。おねしょしない。（3歳）
- ・姉弟でよく遊んでくれるので家事にゆっくり取り組める。（3歳と1歳）
- ・下の子が雨の日に、お兄ちゃんと部屋の中で遊んでいるとき。（4歳と1歳）
- ・一人目はすべてが初めてで、わからないことばかりだったが、二人目は、経験していることばかりなので、余裕をもって子育てができるようになった。（4歳と1歳）
- ・上の子が幼稚園に行くようになって、帰って来ると近所の友達の所へ遊びに行くので、下の子もついて行き、一人の時間をたまに作るができるようになった。（5歳と3歳）

子どもが0～1歳の頃は、母親が子どもにどう対応したらよいかわかってきたとき、子育てが楽になったと感じられるようである。また、母親がべったりと子どもの世話をしなければならぬ状態であったのが、子どもが少しでもひとりで遊んだり、兄弟で遊ぶようになったとき、母親は子育てが楽になったと感じているようである。

2. 子育てサークルに参加したことが母親に与えた影響

サークルに参加したことで、人間関係や子育てにいい影響があったと回答した母親は34人（100%）であった。

具体的な回答事例を以下に示した。

- ・今はどうしても子どもと二人の時間が長いので、皆さんと関わりあう事で先輩ママのアドバイスを聞けたり、何気ない世間話とかができて、自分自身の変化も楽しめて、あまり子どもに対しても神経質にならなくなり、子どももよその子どもさん達とふれあうのも楽しくなっているような気がします。（0歳）
- ・病院の評判など地域のことがわかる。（0歳）
- ・たくさんの方と接し、私自身がストレス解消。子どもも少し大きなお友達から刺激を受ける。（1歳）
- ・うちの子より歳の大きな子や逆に小さい子がいて、何ヶ月か先の成長を想像したり、また何ヶ月か前の事を思い出したりできることです。うちの子は兄弟がいないので子どもどうしで触れ合える時間をとても大切に思っています。（1歳）
- ・色々な方の子育てに関する話が聞けて、色々な見方ができるようになった。（1歳）
- ・自分では知らない遊びなどを教えてもらえる事で、子どもも充分身体を動かしたりできる

(家ではできない)。子ども同志で遊べるようになった(自宅や身内ばかりだとつい内弁慶になりがち)。兄弟ができたときの接し方が参考になった。(1歳と0歳)

- ・ 同年齢の子を持つお母さんたちと友達になれたことや色々相談に乗ってもらえたり情報交換などができる。(2歳)
- ・ 上の子が私から離れてスタッフの方やお友達の所に行ってくれた瞬間が幸せです。上の子がよく歩いてくれるようになった。(2歳と0歳)
- ・ 不安とストレスが発散できて、子どもと一緒に自分も楽しく遊べるようになった。他のママや先生のパワーを見習って元気が出る。(2歳と0歳)
- ・ 子ども、親とも友達ができた。集団の経験。(2歳と1歳)
- ・ 人見知りが見つかった子どもがましになった。(3歳)
- ・ 友達が増え、子どもも少々社交的になった。(3歳と1歳)
- ・ 同じ年頃のお母さんと友達になれたこと。子どもにとっても、他の子達と遊ぶことで色々得られる。(4歳と1歳)
- ・ 手遊び。我が家は転勤型なので人見知りを治したかったので、それが少しずつなくなっているのを助かってます。(4歳と1歳)
- ・ 子どもに家では経験できない様々なことをしてもらえたこと。(5歳と3歳)

まず母親にとっては、子育てサークルに参加したことで、他の母親と接して情報交換ができ、不安やストレスが発散できるようである。さらに、「子どもと一緒に楽しく遊べるようになった」「あまり子どもに対して神経質にならなくなった」など、子どもとの関係がよくなったことをはっきり感じる母親がいることがわかる。

子どもについては、子どもどうしが一緒に遊

べるようになったこと、友達ができたことなどを母親がよい影響として感じていることがわかる。

3. 母親へのどんな言葉かけが子育てを楽にするか

近年問題となっている育児不安を感じている親に、周囲のどんな人が具体的にどのような言葉かけ(働きかけ)をすれば、育児不安感の軽減に役立つのだろうか。広く一般の人々が個人レベルでもできる、簡単で効果的な言動を具体的にを見つけるために、まわりの人からどんな言葉かけ(や働きかけ)をされると子育ての不安感が軽くなるのか、回答してもらった。

一番多かった記述(18人)は「うちの子も同じよ(同じだったよ)」と言われるとホッとするという趣旨のものであった。以下に、この種の内容の回答例を示した。

- ・ 「うちの子も同じよ」と言われたとき。
- ・ 自分の子が出来ない事などがあってちょっと落ち込んだりしている時、友達などから「うちの子もこの年齢の時ではできなかったよ」など言われたときホッとする。
- ・ 同じ悩みを持つお母さんから「私もそうだったよ」って聞いたりすると、わたしだけじゃないんだってホッとする。
- ・ 指しゃぶりがなかなか直らないが、「うちの子もそうだったから気にしなくてもそのうちとれる」とかほかの子どももそうなんだと聞かされたとき。
- ・ 心配事などを話すと、みなさん同じような事で心配していらっしゃるみたいで、私の子もだけではないんだと思い、お互いに気が楽になり、神経質に考えていた事がウソのようになりました(食べる物とか、ミルクの量、子どもの発達具合)。

- ・「自分だけではない、皆そうよ」と励まされるとき（断乳、食事の好き嫌い、一人で食べること、歯みがき等）

このように、自分の子の状態について心配していることが他の子でもそうだとされると、母親は自分の子だけでないのだとホッと安心することがわかる。

次に多かった記述（9人）は「だいじょうぶ」という趣旨のものであった。母親の心配にたいして、心配しなくてよいと思うという意味の言葉かけである。

代表的な記述は次の通りであった。

- ・「泣いても放っておいて大丈夫、運動だから」という言葉かけ。
- ・「子どもは人それぞれ。遅くてもきつといつかできるようになるし。」
- ・発達について遅かったり、できないことを少し不安に思う時、「大人になってできない人はいないから」と言われると、ゆったり育てようと思う。

自分の子育ての不安についての言葉かけがとくになくても、会話しているだけで子育ての不安感が軽減するという趣旨の記述（8人）があった。

- ・世間話でもいいので子どもと自分だけの時間以外の時と一緒に共有できること。
- ・同じ悩みを持つお母さんと会話している時が参考になり、言葉かけは別にはないのですがホッとします。
- ・自分と同じような失敗や経験をした話。

子育てをほめられて子育ての不安感が軽減したという記述（3人）がみられた。

- ・私の子どもはやんちゃで大変ですが、「上手に育てたね」と1回だけ言われたことがあり、うれしかった。

さらに、次のような記述があった。

- ・子どものアトピーのこと、放っておいてほしい。
- ・子育ての不安感と言われると答えがたいです。でも、身近な人に「こうでないとダメ」とか「こうしたほうがいいんじゃない」とか「母乳は大事だからあげた方がいいよ」など言われるとイヤです。自分がダメ母のような気分になります。
- ・男の子が二人というとき、よくお年寄りの方とかに「男の子が二人は大変ねー」とか言われると、すごく落ち込んでしまうけど、友人に「同性だと遊び相手がいいね」と言われると、その言葉が励みになります。性別で判断されるのが一番つらいです。

このように、母親が心配していることや育児についてまわりの人から助言や心配をされるとかえってつらい気持ちになることがあるようだ。「だいじょうぶ」と言われると子育ての不安感が軽くなるという の回答とは対照的である。

また、子育ての不安が軽くなる働きかけとしては次の2つのことが挙げられた。

- ・何か用事がある時には、お互い子どものめんどろを見合うことができること。
- ・子どもがしてはいけないことをした時に、他人の子どもでもきちんと叱って下さるとありがたいです。

より、子育て中の母親に対して他の母親が、「うちの子も同じ（同じだった）」、「だいじょうぶ」という言葉かけがされるとき、育児不安が軽減したと感じられるということがわかった。これは、一般の人が個人レベルで簡単にできるきわめて具体的な言葉かけであろう。 から、ほめことばも不安感を軽減することがある

ようだ。より、心配や助言の言葉かけは不安感を増すことがあることがわかった。

またより、心配や助言の言葉かけよりむしろ世間話のほうで不安感を軽減すると感じられることがわかった。

4. 子育てサークルに参加している母親の子育てを支えている人たち

Q4-1 子育てのことであなたが一番頼りにしているのはどなたですか。あなたにとってどんなことが頼りになりますか。

実母(18人)、夫(8人)、友人(5人)、両親(2人)、子ども本人(1人)が挙げられた。それぞれ代表的な記述を以下に示した。

- ・母；いざという時に助けてもらえる。(3歳と1歳)
- ・母；子育ての経験者であるから。(0歳)
- ・実家の母；精神的な支えになっている。病気の時にも頼りになるし、成長を喜んでくれて可愛がってくれる。(2歳と1歳)
- ・母親；経験的なことや精神的に助けてもらえること。(0歳)
- ・実母；外出時に預かってもらえるなど子育ての先輩として色々教えてもらえる。(2歳)
- ・母；子育ての先輩なので、つい何かと頼って。子どももなついているので。子どもを預かってもらうことも気兼ねなく出来る。(1歳と0歳)
- ・実母；どんなつまらないことでも相談できる。(1歳)
- ・実の母；何かあれば助けてくれるので。(4歳と1歳)
- ・主人；何か迷った時に冷静で適切な意見を言ってくれるので、落ち着いて考えられるき

かけになる。(1歳)

- ・主人；怒る時、私が家事で忙しい時。(4歳と1歳)
 - ・主人；早く帰宅してくれるので夕方は子ども二人をお散歩に連れて行ってくれます。上の子を寝かしてくれるので助かります。(2歳と0歳)
 - ・友人；うちの子よりも大きい子どもがいるので、いろんな意味で情報や経験がある。(5歳と3歳)
 - ・友人；3人子どもを育てているので経験談とか(発育、教育等)。(3歳)
 - ・両親；いざという時、助けてもらえる。子どもの病気、自分の病気、行事、主人の不在時。(2歳と0歳)
 - ・子ども本人；表情、顔色、行動から見てとれる子どもの欲求、体調などが最も子育ての手助けとなっています。(1歳)
- Q4-2 子育てのことであなたが二番目に頼りにしているのはどなたですか。あなたにとってどんなことが頼りになりますか。
- 夫(10人)、友人(9人)、実母(7人)、その他の親戚(8人)が挙げられた。それぞれ代表的な記述を以下に示した。
- ・夫；常に子どもと一緒にいる母親と違い、客観的な見方で意見をくれるところや、子どもは男の子なので体を使った動きのある遊びをしてみようと喜んでいきます。(1歳)
 - ・主人；つい感情的になる私にとって精神的に支えになったり、子どもに対しておおらかなので母子共に安心できる。(抱っこなどイライラした時にすると子どもにもそれが感じる

ので、主人の大きな腕の方が子どもがスヤスヤと落ち着いたりする。) 育児、家事の助け(食事や入浴など)(1歳と0歳)

- ・夫; お風呂入れなどで協力してくれる。(0歳)
- ・主人; 毎日の出来事を話したり、子育てを一緒にしながら相談相手になる。(2歳と1歳)
- ・友達; 友達としての付き合いも長く、同じ年頃の子どもがいるので、お互いたわいもない話をして気分転換が出来ること。(3歳と1歳)
- ・子どものいる友人; 身近なことで常に経験に基づいたアドバイスをくれる。子育てのグチを聞いてくれて笑顔に変えてくれる。(1歳)
- ・友達; 精神的な悩み、育児でわからない事や子どもの事で悩む時。(2歳と0歳)
- ・友達; 同じ年頃のお母さん友達と同じ悩みなどで分かち合えたりする。(4歳と1歳)
- ・実母; 子どもが風邪をひいた時、買い物に行ってくれたり、どちらかの遊び相手になってくれる。(2歳と0歳)
- ・母; 遠方なので直接助けてもらうことはないが、電話でしゃべったりすると精神的な不安の解消にはなると思う。(5歳と3歳)
- ・母; やはり経験者なので。(3歳)
- ・妹; 身近で子どもが歳も近いので色々な情報や体験が聞けること。(0歳)
- ・義母; 実母の次に相談できる。(1歳)
- ・私の父; 子どもと一緒に遊んでもらえること。(4歳と1歳)
- ・兄嫁; 兄嫁の子どもが小さい頃ひきつけをよく起こしていたので、この間自分の子がひきつけた時に色々聞けたこと。子育てについても色々相談に乗ってもらえる。(2歳)

Q 4 - 3 ほかにも頼りになる人がいますか。(はい・いいえ)それはどんな方たちですか。

30人(88%)の母親が「はい」と答えた。

友人を挙げた人が13人で最も多かった。同い年の子どもがいる昔からの友達、子どもがいる近所の友人、少し年上の子を子育て中の学生時代の友人などであった。次いで、夫(9人)、親戚(7人)、実母(3人)、祖母(2人)の順に多かった。その他に、夫の友達、子育てダイアルで相談したことがあるという回答が1人ずつあった。

Q 4 全体の回答を併せて考察すると、子育てサークルに参加している母親が子育てのことで頼りにしているのは、身内と、ほぼ同年齢の子育て中の友人であることがわかった。身内では、第一が実母、第二が夫であった。実母と夫からは、精神的な支えと実際的な助けの両方が母親の子育てにとって頼りになっているようだ。友人からは、実際的な助けではなく、情報や経験談などを聞くことが頼りになるようである。専門家や近所の年輩者、子育てサークルのスタッフは頼りにしている人としては挙がっていなかった。母親にとって日常的な付き合いになっていないからであろうか。

・子育てサークルの参加観察から見えてきたこと

子育てサークルの活動の中にはいって、集団の中で母親・子ども・スタッフの一人一人と関わりながらの観察を継続して行ってきた。子育てサークルに参加している母親がサークル活動の場で成長していった姿として、自分の子から注意が離れていく、以下に述べる過程が最も印象深く観察された。

母親が子育てサークルに参加した最初の頃、母親は自分の子を抱っこしたり並んだりして一

緒にいた。その体勢で他の親子のようすなどを見ていた。子どものほうは子育てサークルに少し慣れてくると、母親から離れて興味あるものや人のところへ近づいていくようになったが、母親のほうはほとんど常に自分の子に注意を払って見ていた。子育てサークルの活動の中で全員で遊ぶときも、母親は自分の子と一緒にであった。母親がよその子に近づくことはあるが、自分の子をともなつてである。それが、サークル活動への参加を重ねるにつれ、母親が自分の子とではなくてよその子と遊ぶようになっていった。このことは次のような全体遊びのときにはっきりと観察された。

子どもをバスタオルの上に乗せて母親が引っ張っていく遊びをみんなでしているとき、自分からよその子をタオルに乗せて引張ってやるという母親の行動が見られた。よその子の親に言葉で了解を求めることはなく、よその子に近づいていって自然に遊んでやっていた。よその子と遊んでいるとき、母親は自分の子のことを気にしていなかった。子どものほうも自分の母親がよその子と遊んでいても平気であった。

母親は自分の子を見ていなくても、ここなら放っておいて大丈夫・安心と思っているようであった。

母親が安心して自分の子を放っておいてよその子と楽しく遊んでいるこの状態は、親と子双方が育ちあう過程として、母親の子育てにとっても子どもの子育てにとっても大変望ましいありかたではないかと考える。

まず、子どもが身内以外のおとなへの信頼を形成する上で、2歳以下の乳幼児期に他人のおとなから親しく関わってもらおうという重要な経験をもったことになる。親のほうは、わが子を自分が見ていなくても信頼できる他人が見てくれているという安心を感じながら、よその子とも安心して関われるという子育ての気楽さ

を味わっているのである。

子育てサークルに参加するようになって初めてよその子の名前を呼ぶ経験をしたという母親が少なくない現状では、このような状態を個々の母親の自助努力によって一から作り出すことはきわめて困難である。この安心で気楽な雰囲気一旦獲得した母親たちから次の母親たちへと集団の場の中で伝承していくほかないであろう。

子育てサークルでの観察を続けているなかで、子育てサークルに参加して積極的に活動している母親たち(A)がいる一方で、サークルに参加してはいるのだが、表情が硬く、社交的なふるまいの乏しい母親たち(B)がいることがわかった。

現在、社会では、閉じこもり孤立した育児中の母親(C)が問題視されているが、BはAとCの中間的な姿である。サークルに参加してはいるのだが表情が硬く、社交的なふるまいの乏しい母親たち(B)がどうやって子育てサークルに参加したのか、子育てサークルの何がよいと感じているのかがわかれば、閉じこもり孤立した育児中の母親(C)が社会的ネットワークへの一步を踏み出すために必要なことが見えてくるのではないかと考えて、サークル活動中に日常会話に交えてBの母親たち(6人)への聞き取りをひとりずつ試みた。

その結果、子育てサークルのことを人から聞いたり誘われたりして参加した人はいなかった。ミニコミ紙や役所の掲示板などで知って来てみたのが参加の始まりということのようであった。公的な場所で開催されているので来やすかったそうである。知らなかった遊びを教えてもらえる、子どもの人見知りがましになってきた、からだを動かして遊べる、などかなり具体的なことを子育てサークルのよいところとして話してくれた。

この母親たちは、参加を重ねるにつれてしゃべって笑うようになっていった。家庭に大きな問題を抱えているという話をした母親は表情の硬さが続いたが、それ以外の人たちはサークルの中で表情の硬さや緊張した様子は見られなくなっていった。BやCの母親たちは、私的な集まりに参加するより、公的なメディアによって知らされる公的な場所での集まりに参加するほうがずっと容易であるらしいことがわかった。

・就園前の子育ての新しいしくみの提案

現在、就学前の子どもが毎日通って保育や教育を受けられる施設として、保育園と幼稚園がある。仕事を持っている母親は、子どもを保育園に0歳の時から通わせることが制度上は可能である。これに対して、専業主婦の母親は、第一子が幼稚園に入園するまで、子育てに非常な困難と不安を抱えやすい。自宅という密室の中で子どもとだけ、ほぼ1日を過ごしてしまうことになりかねないのである。

第一子が幼稚園に毎日通うようになれば、専業主婦の母親も毎日幼稚園あるいは通園バス乗り場に通うようになり、そこで、同じ幼稚園に子どもを通わせる母親同士が顔を合わせ、おしゃべりをするようになる。また、幼稚園の先生との持続的な関係も始まる。こうして、専業主婦の母親にとっての日常的な子育ての社会的ネットワークが形成されていく。

つまり、専業主婦の母親は、第一子が幼稚園に入園するまでの3～4年間、子育ての社会的ネットワークを形成しづらく、孤独で不安な日々を送りがちであることが大きな問題である。

子育てサークルの活動は、就園前の子をもつ専業主婦の母親に社会的ネットワークづくりのきっかけを提供しており、大変有意義なものである。しかし、子育てサークルの活動が実施さ

れるのは、多くても週1回である。それ以外に母親同士が交流を持とうとすれば、個人的に電話をかけ合ったり、互いの自宅を行き来したり、子育てサークル以外の場所で集まったりしなければならない。母親の社交性が必要である。

さらに、現在子育てサークルは、母親たちの自主性に基づき、連携と創意工夫によって活動が行われている。

自分自身が乳幼児を抱えながら中心になって子育てサークルを立ち上げたり、既成の子育てサークルの中で積極的に運営に関わって活動する母親たちがいる。そのような母親たちは、子育てサークルの活動によって社会的なネットワークを築いていくことができる。

しかし、閉じこもり孤立した育児中の母親は今もたくさんいて、身近な子育てサークルの活動にも参加できずにいる。

この問題を解決するためには、専業主婦の母親が0歳から就園までの乳幼児と一緒に毎日通って仲間と交流できる場所をつくることを提案したい。例えば、学校や幼稚園の空き教室に毎日1時間程度決まった時間に通うということである。希望するすべての親子が現実に通えるようにする必要がある。子どもを室内で遊ばせながら、母親同士がおしゃべりをするという程度の活動でも充分であると考え。活動の内容がどのようなものであるかということよりも、決まった場所に行けば、仲間と一緒に過ごせるということのほうが重要である。このしくみによって専業主婦の子育ての負担感はかなり程度軽減できると考える。コーディネーターが1名在室していればなおよい。

このしくみの中に現在の子育てサークルの活動を生かすことは可能である。

・親の働きかた

子育て問題の根本は親の働きかたにあると考

える。現在の日本では、一人の世帯主が家族を養う「世帯主賃金」のしくみである。ここでは長時間の厳しい働きかたが要求されている。女性もこのしくみに入り込み、正社員・正職員では長時間労働を余儀なくされるため、子どもが産まれると就業を断念するか、子どもを深夜まで保育園などに預けるか、あるいは子どもを産まないか、になっている。

子育ての環境を改善するためには、このような長時間労働の働きかたを変えることが必要である。現在よりも短時間の労働を認めて時間生産性に見合った報酬に変えることが、親にとっても、育っていく子どもにとっても望ましい生活のありかたであろう。

すなわち、共働きの両親が今より少ない賃金を持ち寄って家族を養うかわりに、子どもとともに過ごす時間をもっと確保できるようにして、無理なく家族一緒に生活を維持していくようにするのである。

NHKテレビ番組『発見！世界の子育て第6回パパ』によると、カイル・ブルエット博士は17組の家族の子育てを8年間にわたって観察して父親の影響を広く調べた。父親が積極的に子育てに関わった場合、子どもは、乳児期の知的発達が早く、男女を問わず友人が多く、好奇心が強く積極的で、多面的な発想ができるようになることが多かった。父親が子どもの身の回りの世話をしたり、学校での生活や関心事を知るようにして子育てに積極的に関われば、子どもの人生は非常にいい方向に向かうことがわかった。

現在の日本の子育て・子育ての状況を改善するためには、父親がもう少し積極的に子育てに関われるように、子どもと過ごす時間を増やしていくことが不可欠である。

これには、オランダ社会の働きかたが参考になる。長坂寿久氏の日経新聞1998年5月の記

事によると、オランダでは、ワークシェアリングを進めるために、パートタイム労働が積極的に導入された。

1990年代初めにオランダ労組連合が組合員に行ったアンケート調査で、フルタイム労働者は労働時間が短縮されることを望み、パートタイム労働者は労働時間がもう少し長くてもよいがフルタイム労働を望んでいるのではないということがわかった。そこで、パートタイム労働を職種・地位にかかわらず促進することと、フルタイム労働とパートタイム労働とで時給・諸手当・昇進などの待遇の格差を撤廃することで、政労使間が合意した。そして、1996年末から労働時間の長短にかかわらず平等の取り扱いをすることを企業などに義務付ける法律が施行された。

その結果、オランダ人の働きかたは大きく分けると3つになってきた。週5日35 - 40時間のフルタイム労働、週4日32時間のパートタイム労働、週20時間のハーフタイム労働である。この3つの働きかたを組み合わせると、男女ともにライフサイクルに応じた労働時間の調節が可能になった。オランダでは、子育て期にはハーフタイム労働を選択する人が現実が増えてきている。また、子育て期間中の女性のパートタイム進出が広がっている。

このようにして、父親も母親も働きながら今よりもっと楽に子どもを育てていくことが可能になるであろう。

文献

- 大日向雅美 2000 母性愛神話の罫 日本評論社
 汐見稔幸 2000 親子ストレス 少子社会の「育ちと育てを考える」 平凡社
 シャファーH.R. 2001 子どもの養育に心理学が使えること 新曜社

(2003.12.3. 受理)